

# 教員は語る

第三回

芸大への期待・抱負・提言



吉村誠司「Tree」2003年

## 強制しない教育

吉村先生はこれまでずっと芸大にかかわり続けてこられて、芸大の持っている教育システムのよさについてどのように感じていらっしゃるのか。

# 吉村誠司

助教授 絵画科（日本画専攻）

# 漆原朝子

助教授 器楽科（弦楽）

×

吉村 基本を教えて、あとはその先生の作品とか後ろ姿を見て勉強するということ、あまり強要しない、あまり教えずすぎないということですね。自分もそうでしたけれども、先生の助言や友達を見て勉強してきました。技術的にこうしたらいいとアドバイスはあると思いますが、こうすればあなたはよくなるんじゃないかみたいことはあまりないですね。

押しつけないで、自分はこう思っていると提示するだけで、それに共感するかしないかは本人の自由なので、別に反抗したからって怒るわけでもない。賛成してくれたらうれしいですけどもという程度じゃないかと思えます。基本的に自分が正しいわけではないかもしれないじゃないですか。学部生だと幼いと考えの人が多くけれども、大学院ぐらいになると、これはすごいかもしれないなと感じる人もいます。すると、自分が言っていることが正しいかどうかわからないのに教えられないわけです。だからぼくはこう思うよと

言うだけで、あとはその学生が自分の力で伸びていけばいい。頭を押さえないようにするというだけみたいな、感じですね。

漆原 今のお話を伺っていたら、音楽で言ったら作曲家はそうかなと思います。自分でゼロから生み出していくという仕事ですから。

だから作曲をするのであれば押しつけてはいけません。だれかの真似をしたりとか、いろいろなものを混ぜ合わせて作品ができるのではなくて、強いアイデアがあって初めて作品をつくることができる。けれども、ヴァイオリンですと既存の曲を演奏することによって自分を表現するんです。しかも、自分を表現する前に、まず西洋音楽という伝統があって、それをきっちり解釈ができて演奏の面でも技術的にクリアしているということ。がまず基本にあるので、それは教えないといけないですね。そういうものがすべていい形でできたらうで、そこから自分の個性というものが自然



ににじみ出るのがいいかなと私は思っています。なぜなら私たちは日本人なので西洋音楽の血が流れていないんです。放っておくと、お能の摺り足のように、音楽も足を引き摺ってしまふ学生が少なくないんです。私もいろいろ試行錯誤しながら演奏家同士の間でも学び合い、アメリカにもヨーロッパにも住んで、いろいろな文化の違いをすごく実感してきましたので、まず、その文化の違いを説明するところから始めます。例えば踊りにおいても、西のほうの地域であるほど足が上がる。それから東に行くとだんだん低くなっていったて重心がどんどん下がり、最後は日本で摺り足になるとか、そういうことです。

今の芸大と比べてみると、以前の方が音楽的なことを教えるという内容が薄かったように思います。どう楽譜を読んで、どう解釈するかというふうな、フレーズのつくり方や様式感を教えるよりも、指が回ることがまず大事という姿勢が今よりもアメリカ的だったかなという気がします。

逆に、ヨーロッパでは教える立場から見たり、ほかの先生のマスタークラスも見ながら思ったのは、きちつと弾くことより感じるというのが先という人が多いことです。アメリカではいかにアピールするか、いかに華々しく見えるか、いかに個性的に弾けるかに重点が置かれる。例えば、モーツァルトを弾いても、ベートーベンを弾いても、バルトークのような近代の作曲家の作品を弾いても、

同じように弾いても全然構わなかった。そういう人があまりにも多かったので、先生たちもとにかく個性を出しなさいと言っ。もちろんアメリカにもヨーロッパの考え方の先生方もいらっして、そういう先生のところに行くとそうでもないんですけれども、私の場合は、師事した先生からもう個性的にならなさい、あなたの演奏は地味だと言われていながら、個性になることでアメリカ的になるのが嫌で、すごく葛藤があったんです。でも、はたから見たらアメリカ的な演奏になったと言われたりもしたんです。今は悪い意味でのアメリカ的とはどういうものかもはっきりわかってるのでそういうことはないんですけれども。

## 外れることの難しさ

**吉村** 日本画の場合も、個性が重要だからといって型から完璧に外れればよいということはないんです。基本をきちんとやって、そのなかから自分で考えて、外れる。でも、外れるというのはすごく難しいじゃないですか。外れようと思って奇をてらったりすると、またほかのグループのなかに入っていつちゃうわけですから。

日本画として完璧に外れようとしているのを認めているわけではありません。絵画を真剣に考えながら人と違う表現、自分の表現を探っていくこと

を奨励しているのです。だから奇をてらっても、新しいとみんなが思ってくればいいんですけれども、新しいことなかなかないんです。すぐ立体に走ったり、表面的なおもしろさに走る学生がいたりするんですけれども、そういうのを認めているのではないのです。基本的には、平面というわかりやすいからこそ難しい世界で、深く考えて創作するものだと思っんです。本当に深く考えた結果、ちよつと人とは違っていた作品が生み出されるのではないでしょう。

日本画には模写という勉強方法があります。技術的には絵面<sup>えづら</sup>のわび、さび、味などを会得するとともに、その作品の制作過程を一緒にたどることで相手の心の道すじをかいまみるということがができるのです。また、模写に限らず教室ではかの人の制作過程を通して疑似体験したり、与えられた課題をこなすことによって新たな自分を発見し、成長するきっかけをつかむことができると思っます。地道に一歩ずつ踏み出して行くしかないですよ。

## 音楽における自己表現

**漆原** 精神性ということはずごく難しいことだと思っます。今、世界的に活躍している方たちも、エンターテインメントの要素の強い方と、本当に真の芸術を求めて演奏している方と大きく二つに



吉村誠司（よしむら・せいじ）

一九六〇年福岡県生まれ。

一九九〇年東京芸術大学大学院後期博士課程修了。

一九九六年第八十一回院展日本美術院賞。

一九九八年第八十三回院展日本美術院賞。

東京芸術大学美術学部非常勤講師を経て、二〇〇五年より助教授。



漆原朝子の演奏風景（写真提供：ザ・フェニックスホール）

分かれていますよね。ただ、エンターテインメントの要素を持つことができることも才能だと思うので、そちのほうに行きたい人は目指せばいいかなと私は思っていて、無理に芸術をなんて無理強いはしないつもりではあるんです。ただ、いろいろな作曲家がいて、それぞれの曲を演奏するときに、もちろん様式感とか解釈とかも違うんですけども、それだけではなくて呼吸が違いますが、自己中心的な演奏をしていると、どの曲も自分の呼吸になってしまふ。例えば、息の深さが違つか、ちょっと専門的になりますけれども、同じ四拍子でも、どこで吸って、どこで吐くかが作曲家によって違ったりします。もちろんその曲によっても違つし、曲の場所によっても違いますけれども、より作曲家に近づき、より深みのある演奏をしていくための手段としては、呼吸のことを一緒に考えることはとても大事なことだと思うのです。

**吉村** 音楽の場合、基本的には作曲家に近づこう

とするんですか。

**漆原** そうです。作曲家があつて、演奏家がいるわけですから、もちろんエンターテインメントのほうに行く人たちは作曲家を軽視して、より自分を出すという方向の方が多いですが。

**吉村** 自分を出そうと思つて自分が出るんですか。

**漆原** いちばん私が理想にしているのは、演奏する曲、その作曲家の存在があつて、それと同時に自分があるという、それが理想的で、何かしようとして最終的にはこうしよう、ああしようというのではなくて、いろいろな知識とか、テクニックが身についたうえで自然ににじみ出てくるもの、それが個性だと思っています。アメリカの人たちは、無理やり外側からの見せかけのものを個性と言つことが多いんですけども、それよりにじみ出てくるものが、その人の個性かなと思つています。

それは、吉村先生の話にあつた枠からはみ出す、はみ出さないという話と同じですよ。

**吉村** そつですね。

**漆原** 西洋音楽の知識がまちがっていると、にじみ出てくるものを妨害してしまふし、変な方向に行つてしまふので、まずきちつとした解釈とか知識、テクニックを身につけたうえで、あとは自然にできるというかなと思います。難しいことなんですけれども。

ドイツのマインツ大学の音楽学部で教えていたことがあるんですが、そこで私が教えたのはイタリア人、韓国人、日本人でした。結局、ドイツ人は直接は教えなかったんですけども、でも、国によつて違つなという印象があります。ほかの先生のレッスンをちょっと見たりすると、生徒さんが国によつて違つ。私がたまたま教えたイタリア人の子は男の子で、すごく感じて弾いているんで

すけれども、どこかアバウトなんです。だから、もつとこの音はこつで、この音はとか言つていたら、どうしてそんなに苦しんで正しい音を弾かなければいけないんだ、ぼくは楽しむために音楽をやっているんだ、だからしかめっ面をして弾いているドイツ人は嫌いだ、なんて彼は言っていましたね。

**吉村** 今は何が楽しくやるとか、いろいろはやつているでしょう。でも苦しいと思つてですね。おもしろいというのは、要するに絵を描くということは、トンネルを掘っているみたいなものだと思ふんです。苦しくて、もうだめだと思つたときに、杭をさしたら向こうから光が見えてきて、それをかき分けているときは楽しいじゃないですか。そういう楽しさだと思ふんですね。それを初めから何もしないで楽しくやるといふ。でも、それでいい作品ができたらいいですけどね（笑）。

## 芸大生気質が変わつてきたか

**漆原** 先生は助教授に着任されて、まだ一、三カ月ですけども、先生が学ばれていたころと、今の学生さんと、芸大の雰囲気などで何かちよつと変わったかなと思われる部分というのは何かあります。

**漆原** 学生さんたちの曲に対する理解が以前より高まっている気がします。これはひとえに先生方のご指導の賜物だと思います。それに、ヴァイオリンしか知らないみたいな学生が前より減つたんじゃないかなという感じがします。ソロだけができればいいというより、室内楽ができて、オーケストラのなかでも弾けて、それぞれにふさわしい弾き方が自然にできると理想的だと思うんですけども、そういう意味で、先生方のお話をうかがつて



みても前よりはずっと視野を広く持つように教育するようにしている先生が多い、とのことで、とてもいい傾向だと思っています。

ソロだけ弾けばいいというのは危険で、例えば、普通のプロの音楽業界のなかで、だれかソリストが来て室内楽を弾いたら、全然相手の音が聴けなくて自分だけ勝手に弾いて、やっぱりソリストは弾けないねというふうなことを言ったりするのをよく聞くんです。

**吉村** 例えば学生で、絵でも人の意見を聞かない人がいる。人の意見を全く聞かないようなのはダメなんです。人の意見も聞いて、自分がしっかりある人じゃないと。

だから譲るところは譲って、人の話も聞いて、それでいて自分の信念を持っている人がいい絵を描けると思うんです。

## 共同作業のあり方

**漆原** ヴァイオリンを一人で弾くという、ソロの曲はすごく少ないんです。バッハのソロとか、バルトークのソロとか、そのぐらいで、ほとんどの場合、必ずだれかと一緒なんです。やはりアンサンブルの経験がないと、たとえピアノと二人で弾いても相手の音が聴けないという弊害が出てくるんです。

だから自分の音だけでなく、ほかの人の音を



聴きながら一緒に音楽をつくっていくとか、一緒に空気を感じながら一緒に呼吸するとか、そういうことというのはすごく大事で、ソリストがオーケストラとソロを弾くときでも、一人で突っ走ってもいいかもしれないんですけども、音楽という意味で内容の深いものにしたいのであれば、やはりオーケストラの音が聴けて一緒に呼吸できたほうがよいのです。私はソロしか弾かないわと、もし言っている人がいたとしても、アンサンブルの勉強を積極的にしましょうという、今の先生方のお考えはすごくいいと思います。前からそうだったのかもしれないんですけども、より、それが明確になっているのではないかなという気がします。

**吉村** 美術の場合、人と一緒に一枚の絵をかくというわけにいかないですからね。例えば自分がやったのは「狩野派再現」という、過去のを再現するということで、みんなで共同作業でやったのはありますけれども、それは言ってみれば自分の考えの絵ではないわけです。言いかえると、その人を通しての体験ですね。自分の考えで描けと言われたら、人に何か言われたいわけじゃないし、孤独なんですよ（笑）。

## 芸大が果たすべき役割

**吉村** 基本は日本画を通して、深い考えで絵を描

いていくような人が育ってほしいなと思います。何が深いのか。表面的な物事のおもしろさとかきれいさとかで絵を描いていく人ではなくて、本質的ななぜこれを描きたいんだとか、なぜこれを描くんだということを考えられるような人が増えていくといいなと思っています。

**漆原** 芸大が果たしている日本における役割は大きいと思います。それに、西洋音楽をただの借り物ではなくて、ちゃんと本質をとらえて演奏させようというふうなふうに思っている先生が増えているんじゃないかなと思います。

日本人で欧米とかで活躍している人は、ほかの楽器に比べてヴァイオリンでは結構比率的には多いかと思うんですけども、残念なことにあちらの音楽家たちが話すのは、日本人はよく弾けるねというところで終わってしまうんです。ただそれがその音楽を深く理解してよく弾けるというのではなくて、音楽を理解していることは置いておいて、よく弾けるねと。そこから日本がなかなかそれ以上に行けない状態なので、よく弾けるだけでなく、音楽を深く表現できる人が出てくるためには、日本で役割が大きいとされている芸大の学生たちがそういう意識を持てるようになることが必要なのではないでしょうか。私としては、インターテインメントを目指す音楽家より、芸術を深めるということを目指している音楽家が増えてほしいなと思っています。

漆原朝子（つるしはら・あさこ）

一九八三年第二回日本国際音楽コンクールにおいて最年少で優勝ならびに日本人作品最優秀演奏賞を受賞。  
一九八五年東京芸術大学に入学し、翌年より文化庁芸術家在外研修員としてジュリアード音楽院に留学。  
一九八七年第四回アリオン賞。  
一九九〇年ジュリアード音楽院本科を卒業。同年モービル音楽賞奨励賞。  
二〇〇五年より東京芸術大学音楽学部助教授。